

お手玉遊びの起源について

お手玉についての補足



絵の題名は「お手玉遊び」。大きさは42cmの大理石の蠟画です。ヘルクラネウムという所からの出土です。この町は遺跡有名なポンペイの隣の町で、火山噴火のとき一緒にうまってしまったそうです。作者はアテネのアレクサンドロスという署名があります。

西洋絵画ではみなし絵とかやつし絵といって絵画の製作依頼者(スポンサー)が神話や聖書の題材を使ってその人自身や身近な人の肖像や生活状況を描いてもらう習慣があるので、おそらくこの絵もギリシャ神話を題材にして当時のスポンサー周辺の生活状況を表した風俗がでしょう。後ろの左がアポロの母親のレト、中央がニオベ。前の二人は立てひざをついてお手玉をしています。

お手玉部分の拡大図。お手玉は足元と空中と手の甲の部分に描かれ、形からみて、動物などの首や背の部分の骨に見えます。

写真は「原色世界の美術 イタリア1 小学館版」より抜粋



「子供遊び大全 近藤ケイ著、新宿書房」に描いてあるお手玉の技より抜粋。この本には50種類以上のむかしの遊びがイラスト入りで解説されているので、遊び方を知るのには大変役にたつ。

あずき

小豆を使ったお手玉のはじまりは、そんなに古いことではないと思いますが、お手玉遊びの起源については、少なくとも紀元前430年頃だと言うことがわかりました。イタリアのナポリ国立美術館所蔵の大理石に描いた絵にお手玉遊びをしているのがあります。その絵は西暦一世紀に描かれた模写で、もとの原作は紀元前430年頃だと考えられています。

この絵には女の人が立てひざをついて、手の甲と空中と足元にお手玉らしきものがみえます。絵の題名も「お手玉あそび」といいます。しかしそのお手玉の材料は、小豆や布ではなく、なんと動物などの首か背中の骨なのです。なぜ材料が骨なのか、身近にある材料だからなのか、それとも何かのおまじないなのか、骨の外にも布でできたお手玉はあったのか、この絵のテーマはギリシャ神話の中の「ニオベ族の最期」といって自分の子供を自慢したばかりに、怒った太陽の神アポロン一族にすべての子供達を弓で殺されてしまうニオベという母親の物語のシーンの一枚です。こういう怖い内容の話なので、これと関係があって、私達にとっては気味の悪い骨のお手玉がでてくるのか、いろいろ想像がはたらきます。しかしいずれにしても、お手玉遊びはその時代からあったということがこの絵からわかりました。

また下のイラストは1991年発行の「こども遊び大全百科」という本に出ているもので、昭和20年、30年代のお手玉遊びを思い出して絵にしたものです。手の甲にお手玉をのせる遊び方など、ギリシャ時代と同じ技があって、驚ろいてしまいます。